を活かした人づくり、まちづくり 第4回

いま全道各地の河川では、川を活かした学習活動やまちづくり活動などさまざまな分野で、行政とも 連携しながら多くの市民団体が活動しています。地域でこうした活動を実践している方々に、「川と人づ くり、まちづくり | をテーマにお話していただき、これからの川づくりにつなげていきます。

鵡川の自然環境の保全と再生



小山内 恵子氏 ネイチャー研究会inむかわ 会長

インタビュアー

真砂 徳子氏 フリーアナウンサー

※真砂氏(左)、小山内氏(右)の後ろはシシャモカムイノミのヌサバ

ネイチャー研究会inむかわ

真砂 「ネイチャー研究会inむかわ」がどういう 団体で、どんなことをされているのか教えていた だけますか。

小山内 私たちの研究会は鵡川河口干潟の保全をする会と思われていますが、そうではありません。初め自然好きな人が集まって、自然の中で自分たちが楽しむことが目的でした。鵡川町の広報に野口徹夫さんがコラム「鵡川の自然」を書かれていて、私がそれに、挿絵をつけていたのですが、彼の声がけで「自然好きの会」を作ろうと、私も誘っていただきました。

真砂 挿絵を描くだけではなく、更に小山内さんが積極的に参加したいと思ったきっかけは何だったのでしょうか?

小山内 鵡川の植物を知りたいと思いました。私の故郷の名寄とは微妙に植物相が違います。勇払原野の東に位置する鵡川は、夏は冷涼で冬は降雪が少ないのです。植物の詳しい方とお友達になりたいと喜んで行ったら、鳥好きの人、山菜好きの人、10人ほど集まっていました。野口さんを会長に、会の名前は「ネイチャー研究会inむかわ」。

月に1回の鳥や花の観察会をすることになりました。

真砂 研究会は、発足からどれくらいになるのですか? それから、参加者は増えているのでしょうか?

小山内 ちょうど10年です。最初は10人ちょっとで、今は49名です。「自然好きの者、集まれ」がキャッチフレーズで、バードウォッチングや植物観察を楽しんでいます。

真砂 歯科衛生士のお仕事をしながら、地域の 方々と触れ合う時間をつくるのは大変だと思いま す。リーダーもされるまでのめり込んだのはどう してでしょう。

鵡川河口に関する懇談会で干潟を知る

小山内 ちょうどそのころ、鵡川のあるべき姿を みんなで検討する「鵡川河口に関する懇談会」 **1が発足したのです。私もメンバーに入れてい ただきました。それが鵡川河口の変遷や海岸侵食

*1 メンバー 鵡川町役場、鵡川町教育委員会、鵡川町環境審議会委員、鵡川町社会福祉協議会事務局長、鵡川漁業協同組合、 北海道鳥獣保護委員、鵡川町河口環境保全モニター、ウトナ イ湖サンクチュアリ主任レンジャー、むかわ柳葉魚を語る会、 「ネイチャー研究会inむかわ」、室蘭開発建設部。 を知るきっかけです。地元の自然愛好者として、 どうしても頻繁に河口へ行かなければと思いました。河口懇談会が始まったころ、海岸侵食はピークで、台風のときなど1日にして、ハマナスやハマヒルガオなど海浜植物の群生地がなくなるのも目の当たりにしました。「どこが干潟なの?どこにあるわけ?」というありさまでした。でも、鳥たちは来ていました。何にもない砂浜や河口に小鳥たちがいるだけで、見違えるほど生き生きとし



コミミズク

た風景になります。春や秋にはシギ・チドリ類だけじゃなく、カモ類、ハクチョウ類、冬にはオオワシ、オジロワシ、草原性のフクロウのコミミズクもやって来ます。「鵡川ってすごい所だったのだ!」とわかってきました。野口さん

が仕事の関係で千歳に引っ越しされて、私が会長に推されました。「何で私なの?役員でもないのに」すると「小山内さんは例会出席率が1番よ」といわれ、「じゃ、1年だけ」と引き受けて8年です。

真砂 小山内さんがリーダーになられてから、会の目的や目指すものは変わりましたか?

小山内 目的は同じでも、テーマがどんどん膨らんできました。河口懇談会は、1996年から2000年まで11回行われました。干潟の保全とか、過去の歴史も踏まえて、知らないことを聞き、勉強させていただくよい機会でした。しかし、その間にも侵食のため砂嘴はやせ細り、河口干潟は風前の灯です。自然の力に比べて自分たちの無力さを認識させられました。同時に何かしなければと強く思うようになりました。私たちはまず、干潟の環境の指標であるシギ・チドリ類を数えることから始めたのです。そうしたら、意外や意外、結構、鳥が来ているのです。

真砂 先ほど河口で、副会長の門村徳男さんに伺いましたが、200以上の種類と聞いてびっくりしました。

小山内 ええ、種類だけでなく数も出ます。例えば今年の 夏に、とってもかわいいアカ エリヒレアシシギが来ました。 **真砂** 河口で見せてもらった



アカエリヒレアシシギ

写真とはまた違うのかしら。ちょっと赤くなって

いる。

フライウエイ

小山内 そうです。これが150くらい出ました。 河口は鳥だらけ。鳥たちの重要な渡りの中継地だ と実感しました。今年の春にはトウネンが1000く

らい出ましたよ。でも、「鳥たちが出ているね」「貴重な河口を守ろうよ」と単純に話しても、みんなによく伝わらない。それで河口懇談会のメンバーでウトナイ湖のチーフ



トウネン

レンジャーが教えてくれた「東アジア・オーストラリア地域シギ・チドリ類重要生息地ネットワーク」(フライウエイ)*2に参加することを願って活動することになりました。それから、ネットワークに参加する基準値*3の鳥を数えるため、足しげく河口に通いました。

真砂 数を数えに?

小山内 そう。私は仕事があるので、朝ご飯をつくってから河口へ、職場へまっすぐ行けるように車に白衣を入れて。それで参加基準を超えるメダ

イチドリを確認しました。町 と町議会に働きかけ、推薦文 をオーストラリアのブリスベ ンまで届けました。でも結果 は「モニタリングが必要」と クレームがつきました。研究



メダイチドリ

会にとって大きな出来事でした。現在もずっと チャレンジしています。

今、何かしなければ永遠に失われる

真砂 そこまでして干潟の保全や再生の活動を続けているのですね。

小山内 鵡川の河口部は、この20年間で海岸線が400メートルも後退したといわれています。潟湖がなくなって、90%の干潟が失われました。浜を元に戻すのが理想ですが、早急に鳥たちの餌場の確保に人工の干潟が必要でした。でも、最初はみ

^{*2} シギ・チドリ類の重要な生息地を協力して保全するための 多国間ネットワーク。アジア太平洋地域の渡り性水鳥保全戦 略に基づき、構築された3つのネットワーク(シギ・チドリ類、 ツル類、ガンカモ類)のうちの一つ。同ネットワークには、日本、 ロシア、中国、韓国、フィリピン、インドネシア、オースト ラリア、ニュージーランド、パプアニューギニアの9カ国から、 シギ・チドリ類にとって国際的に重要な生息地27カ所が参加 している。

^{*3} 参加基準 ①定期的に2万羽を超える渡り性シギ・チドリ 類が利用している。②定期的に特定の種(または亜種)の推 定個体数の1%を超えるシギ・チドリ類が利用している。

んなが鳥たちのためにそこまで考えない、何もできないと思っていました。そしてまた、「今、何かしなければここは永遠に失われる」と思ったのです。

真砂 確かに、干潟の消失や、自然再生の意味を 理解しない人は多いですよね。ところが、小山内 さんたちは、その渦中で活動されている。例えば、 私たちもカムイノミ**4を実際に見るような体験 ができればよいのですが、そこまでには至らない。 普通に家に住んでいると、干潟がないと暮らしづ らいという考えにはなかなか及ばないのが現実 です。

小山内 そうです。頭を悩まして夜も寝ないで考えても別に生活が潤うわけでなく、何のためにと思うこともありました。活動仲間がいること、やっぱり私たちは自然の貴さに打たれてしまって、何の損得もなく、守ることがとても大事で、必要だという気持ちになりました。

真砂 あの河口に立っていたら、きっとそのような気持ちになるのでしょうね。



小山内 シギ・チドリ類は、南はオーストラリア、北はシベリアなど地球を半周する旅を続けています。自分の命をただつなぐためだけに生を営んでいる。そういう生き物の尊さや生き物

そのものを守りたい気持ちです。そのため、旅の 途中で鵡川のような採餌し、休息できる中継地が とても重要です。

真砂 鵡川が中継地として鳥に利用されているのは、地形的にわけがあるのですか。

小山内 道東にはシギ・チドリ類に利用される湖沼や、海に面した湿地帯がたくさんありますが、太平洋側で干満の差による干潟ができ、ゴカイが発生する場所は鵡川ぐらいです。

真砂 大事な場所ですね。道外のバードウォッチャーもたくさん集まる場所と伺いましたが、私は、北海道にいながら、鵡川がそのような場所だとは知りませんでした。

小山内 干潟を守り育てるため、まずは人工干潟 にたどり着きましたが、昔の潟湖を取り戻すのが 夢です。それに向けて今でも 話し合っています。でも、数 年で干潟を戻すとは全然思っ ていません。50年後、100年 後かなあと思います。でも 100年後には私たちは誰もい



チュウシャクシギ

ません。鵡川の河口干潟を守るのは未来の子供たちです。この思いを子供たちに知ってもらいたいと「環境副読本―鵡川河口へ―チュウシャクシギ君*5の旅」を出版しました。鳥の目線で書かれた物語の絵本です。

真砂 (絵本を読みながら) そうなのですか。それにしても素敵な絵ですね。

小山内 シシャモが出て来たり、途中で洪水になって、干潟がなくなりますが、鵡川では大雨が降ると普通にあることです。

真砂 あら、本当だ。海が泥水のようになって大変。このような歴史があったのですね。

小山内 鵡川の名前のもとは「ムカッペ」で、上 げ潮で河口部が閉塞ぎみに「ふさがる川」という 意味のアイヌ語です。土砂の排出量、沿岸の漂砂 も多く、文字通りふさがる川で、長い砂嘴も生ま れます。シルト分が多い川で、河口部では泥もた まり、ゴカイの棲む干潟もできるのです。今ある 干潟やそこに集まる鳥たちを100年後の子供たち に見せたくて、人工でも小さくても、鳥たちの餌 場となる干潟をつくりたいと北海道と開発に要望 書を出しました。河口懇談会のメンバーに同意を 得るために歩きました。漁協から「海で魚だけを 捕れればいいなんて、ちっとも思っていない」「自 然を守らないと魚は捕れないからね」と聞いて感 激しました。河口の砂浜がなくなったのは、港の 突堤物のせいでもありますが、生活を支えている のも港です。港の入り口に漂砂がつくと、船が出 られず、魚を満載にした船が戻るには海岸線と平 行になり、横波をかぶりとても危ない。漂砂で苦 しめられる漁師さんなのですが、私たちの自然の 活動に、理解し応援してくださる方が多いのも わかりました。

真砂 そのような気持ちがあるとわかっただけで も、感動しますよね。

小山内 河口懇談会をきっかけに、開発の方と話をすると、川の知識や知恵をたくさん持っていて、

^{**4} カムイノミとは、「神に祈る」という意味で、アイヌ民族が、神格であるカムイを帰す儀式。例えば狩りの獲物に対して、獲物を着て自らのもとへ来てくれたカムイに感謝し、神の国へ送り帰す。

^{※5} ネイチャー研究会inむかわが企画編集発行した副読本。

私たちは色んなことを教えていただきました。今でも人工干潟などに問題が起きると、皆さんに声をかけて集まります。

真砂 すぐ集まってくださいますか。

グランドワーク「わくわくワーク・むかわ」 のビジョン―フライウエイになれる干潟

小山内 はい。河口懇談会では「鵡川河口を保全するためのメニュー」をつくりましたが、会が発展的に解消すると同時にメニューを1つでもグランドワークできる「わくわくワーク・むかわ」を立ち上げました。メンバーとして、「河川愛護会」「柳葉魚を語る会」「川塾」そして、「ネイチャー研究会inむかわ」です。河川事業所、役場も参加しています。時には東海大の吉澤先生から工学的な意見をいただいたり、人工干潟が出来てからは手弁当でベントス調査を行ってくださった北大水産学部の中尾教授と学生さんも参加していただきました。ざっくばらんな勉強会を何回も開いて「私たちの干潟」について語り合いました。そして、少しずつビジョンが見えてきたのです。

真砂 明確なビジョンとは?

小山内 はい。生物学的にいえば、フライウエイ 基準を満たす鳥の数です。鳥がいれば、干潟にそ れを支えるだけの生物相があることです。そして、 30年前の航空写真に見る干潟にたどり着きたいと いう共通認識を持ち始めました。

協働事業~100年のスパンの視点で

真砂 活動を通し、行政との恊働や、パートナーシップという点では、いかがでしたか。

小山内 私たちは10年、活動を続けていますが、 行政には異動があります。でも、ちゃんと引き継がれていて、いつも熱心な担当者と話しやすい状況です。私たちは河口を見て「海水交換水路が閉塞されて、人工干潟の水が引かない」などと電話します。「ちょっと1週間ぐらい待てませんか」と言われると「ゴカイが死にます。干潟を生かしてください」と事実をそのままに伝えます。すると、きちんと対応してくれて「すぐに確認に行きました。小さな道筋をつけて、海水交換をスムーズにします」と担当者が応えてくれます。干潟にとって、少しも待てないこともありますね。じゃあ!スコップを持って自分たちで掘るしかない。そんな思いです。

真砂 やるしかない。

小山内 そう。だから、'05年は河口部に大きな

水害がなかったのでとても良かった。反対に干潟 の中がかき回されなかったけれど。

真砂 それも問題なのですか。

小山内 そうです。泥がたまってきて、水が動かない。干潟の自然を維持するためにかくらんが必要です。かくらんがないとヨシなどの植物がどんどん繁茂し、見た目にはすごく自然ですが、せっかく掘削した干潟の地盤が高くなりゴカイの棲む場所が狭められます。本当に人工干潟は問題っ子です。「わくわくワーク・むかわ」のみなさんと「さあどうしよう」。「今年、ヨシを抜いても、来年はもっと生える。それを止めるにはどうするか」自由な発想で議論が続きます。開発も「人工干潟の防草シートがどの程度役に立っているか、掘って検証してみよう」とアイディアを出します。去年は12月にみんなで胴付きをはいて、ヨシを引き抜く作業をしました。大事な干潟をみんなで守ろうとしています。

真砂 皆さんが干潟のために知恵と汗を出す活動が続けられている。しかも行政の担当者にこの活動についてしっかりと引き継ぎがある、というのは、まさに理想の形ですね。他に、注文はありますか?



小山内 特別なことは何もありませんが、時間をかけてほしいことです。行政の事業は必ず限られたスパンです。自然は10年くらいではだめだと思います。

真砂 それじゃぜんぜん足りないと。

小山内 そうです。やっぱり少なくても100年でしょう?無理な注文とはわかっていますが、そういう愛情を持った気持ちで仕事をしていただきたい。今までの担当者の方の中には、転勤されても、河口に寄ってくださる方もいます。それはすごいことだと思いました。

顔がみえる話し合いで地域性の引き出しを

小山内 もう1つは「顔が見えてゆっくりと時間をかけた話し合い」です。同じような河口でも、土地に根づいた固有の歴史や暮らしがあります。その土地に必要なものが必要なだけの事業や施工であって欲しいのですよ。地域の人はみんな口べたで自ら先に声を出す人は少ないと思うので、そこを聞き出してほしいですね。

真砂 勇気のいることですものね。



鵡川人工干潟(2003年7月29日撮影)

小山内 私は普通の主婦なので、その気持ちが とってもわかります。まず、地域性やその思いを 引き出してほしい。ゆっくり話をして、ニーズに 応じたことする時代だと思うのです。

真砂 私は埼玉の出身で、北海道のイメージは、広く雄大で、豊かな自然に囲まれ、食べ物といえば、カニやお寿司。そして大らかな人の集まる場所というものでした。でも、各地取材でうかがうと、地域性や食べ物、風土、住んでいる方のキャラクターも、実にさまざまで、多様な魅力があると感じます。「地域性を引き出す」ためには、その地域の個性を尊重することが必要だと思います。一律に決め、あてはめては、個性がなくなりもったいないですよね。

小山内 私もそれが1番大切と思う。行政の方は 知識と膨大な資料をお持ちです。本当に私たちは 教えられましたもの。航空写真を見るだけでも、 波の方向、海の深さがわかるものなのですね。

真砂 ネットワークやコミュニケーションが大事ですね。地域の方々もあきらめないで、「教えてほしい」と歩み寄り、行政の方々も、みんなが何を求めているかを、実現とは別にして、聞く、知ることは大事ですね。

小山内 人工干潟を今の場所に決めたのも、専門家の知識です。海水を交換する水路は旧河川道から河川への既存の排水路を利用し、そこに人工干潟をつくったのも治水上問題がなく、地域に迷惑にならない場所だからです。干潟の中には霧筋をつけて水が自然に循環し、鳥たちが利用できる浅い場所も広がりました。1年目に1haを試験地としてつくり、水の流れやベントス調査をしてか

ら、さらに1.7haを造成する工法です。

真砂 いろいろ考えてつくられているのですね。 **小山内** 全部みんなの話合いで決めています。

真砂 私もあの場所は、誰かに伝えたいと強く思いました。アイヌの人達がカムイノミをされているあの場所です。

大切にされているところは生きる文化の場

小山内 昔からとても大切にされている場所なのです。まだまだ、私たちの知らないことがいっぱいありますね。自然や文化は住んでいる私たちの誇りとなるものです。

真砂 アイヌの方たちが自然に畏敬の念を持ち、営んできた暮らしぶりは、きっと、今住んでいる 人達の心の中にも受け継がれていますよね。

小山内 いや、絶対そうだと思う。アイヌの人たちの考え方がそうですから。

真砂 そうですよね。

小山内 アイヌの人たちの生物に対する畏敬の 念、自然に対する畏敬の念は根本だとすごく思う のです。鵡川は生きている川なのです。生物を育 む川なのです。

真砂 そのような視点で、川や自然をみつめることは大切ですね、とても勉強になりました。

小山内 河口は行くたびに形が変わります。砂嘴が短くなったり、海に突き出たり、それは「川が生きているのだよ」というあかしです。

(本インタビューは、平成18年11月15日に鵡川河口干潟で行いました。掲載の鳥類の写真は門村徳男氏撮影です。)



オジロワシ

profile

小山内 恵子 おきない けいこ

1953年名寄生まれ。'74年旭川歯科学院専門学校卒業、同年鵡川町立歯科診療所へ就職、'76年旭川歯科学院専門学校講師、'78年結婚と同時に鵡川へ、'80年から鵡川歯科診療所勤務。'96年にネイチャー研究会inむかわ発足と同時に参加。'98年から会長。現在に至る。

真砂 徳子 まさごのりこ

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設。